



TITLE:

# 吉野林業研究 (その3) : 吉野林業における木材市場の展開一樽丸材を中心として

AUTHOR(S):

森田, 学

---

CITATION:

森田, 学. 吉野林業研究 (その3) : 吉野林業における木材市場の展開一樽丸材を中心として. 京都大学農学部演習林報告 1967, 39: 247-256

ISSUE DATE:

1967-11-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191431>

RIGHT:

## 吉野林業研究(その3)

### 吉野林業における木材市場の展開——樽丸材を中心として

森 田 学

Studies on Forestry in Yoshino (3)

Development of Timber Market on the Forestry of Yoshino

— with special reference to timbers for barrels (“Tarumaru” Timber) —

Manabu MORITA

#### 目 次

要 旨……………	247	4 吉野材を中心とする時期……………	254
1 樽丸材流通機構展開の時代区分……………	249	5 総 括……………	255
2 新宮材を中心とする時期……………	249	文 献……………	256
3 九州材など他地方樽丸材を中心とする時期……………	252	Résumé……………	256

#### 要 旨

1. 地域林業構造の展開方向は、木材採取資本と林地所有の対抗関係によって基本的に規定されることが考えられる。木材採取資本は外部から導入される場合（一般に木材問屋資本であることが多い）と、内生的に山元において成熟発展する場合とがあり、それが林地所有ないし育林生産と係わることに於いて、前者では地主型林業構造、後者では農民型林業構造の展開を規定すると考えられる。

2. このような木材採取資本の態様を検討するには、そこで展開される木材流通機構の変遷を究明することが、1つの手がかりを与える。

吉野林業の場合、この種の検討はいまだ不十分であり、とくに明治以降における木材流通機構の変遷と林野所有との関連分析はほとんどみられない。この小論は吉野林業における木材流通機構のうち、まず、もっとも特徴的な樽丸材の流通機構の展開について検討し、吉野林業の性格を究める手がかりをえようとした。

3. 樽丸材の流通機構については、その展開を次の3つの時期に区分して考えることができる。  
イ. 新宮材を中心とする時期（明治～大正初期）ロ. 九州材など他地方材を中心とする時期（大正中期～昭和初期）ハ. 吉野材を中心とする時期（昭和戦前期）

4. 第1期は十津川、北山川流域天然スギ材の山元樽丸加工、新宮問屋による集荷販売が樽丸供給の主体をなす。灘樽丸問屋の成立期。和歌山問屋は大阪問屋と吉野川流域山元荷主（木材業者）との中継問屋としての性格をもち、単なる手数料商人としてあるにすぎず、山元に対する問屋支配を可能とする資金蓄積条件に乏しかった。

5. 第2期は灘酒造業の興隆期で、その樽丸需要も急増する。これに対し十津川、北山川流域における天然スギ資源の枯渇および全般的な育成林業への転換が、吉野林業地域よりの樽丸供給を減少させる。このため灘樽丸問屋は九州、鳥取、岩手での直営樽丸加工により必要な樽丸確保を図った。

大正8年以降の北洋材入荷は和歌山市場を北洋材加工生産地市場へ転換させる契機を与え、吉野林

業との関連を低めた。

6. 第3期は灘樽丸問屋の最盛期とその急激な衰退期を含む。外材入荷による一般木材価格の低落は樽丸価格を相対的に高め、吉野川流域における樽丸生産を拡大した。しかし、戦時経済の深化と酒樽の代替品転換とが樽丸生産流通を急速に終熄に導いた。

北洋材入荷吐絶により和歌山市場は再び国内材加工生産地市場へ転換するが、奈良県南部平野の製材業の成立とそれに伴う市場の拡散が、和歌山市場と吉野林業との再結合を妨げた。

7. 以上の樽丸材流通機構の展開を通じ、明治以降において大阪木材問屋、灘樽丸問屋は吉野林業に対して決定的な支配力を持続して維持し、影響を及ぼすことが少なかったといえる。それは吉野材運送条件が運送経路独占による木材問屋資本の閉鎖的集荷圏の形成を妨げ、また吉野林業の生産する商品が一般素材と樽丸材に分化し、その流通機構を異にしたことなどによる。

8. このため、吉野林業における資本と土地所有との関連を究明するには、吉野川中流域周辺を含めた山元木材業資本の発展分析が今後の重要な課題となる。

いうまでもなく、吉野林業はわが国の先進の人工林民有林業であり、このため、吉野林業に関する研究も数多くみられる。とくに近時、吉野林業の成立発展に係わる研究については飛躍的に進められた感がある。

これまでの諸説において<sup>1)</sup>、吉野林業における大規模経営の成立は、農民的林業の挫折ののちに、奈良平野南部の地主および商業、高利貸資本による立木の集中、更に林地の集中が進められたところに成立したとされ、また、このような農民的林業挫折の条件としては吉野地方における農業基盤の弱さと、大阪特権商人の厳しい支配があげられている。しかし、この後者、すなわち大阪商人（問屋）支配の組織、とくに和歌山、新宮問屋を介しての山方商人および農民との結合ないし支配関係については明らかにされておらず、林地所有の変遷にもっとも係わると思われるこれらの分析は今後に残されているといえるであろう。

ところで、これまでの研究は主として藩政期を中心におこなわれたものが多いが、一般の林業地における林野所有の変遷についてみると、明治以降、我国の資本主義発展に対応する新たな木材市場構造の展開は、藩政期に成立していた木材流通機構の改変を進め、既存の流通機構を背景として成立した林野所有にもまた著しい変化がみとめられるのである。とくに日用商品を主として取扱う前期的商業を通じ成立した林野所有、あるいは藩政期の特権の営業によって取得し成立した林野所有などは、明治以降、所有者たる特権商人ないし日用品取扱い商人みずから木材商業資本へ転化するか、あるいは新たな流通機構の中で成長した木材業資本にとってかわられることが、しばしばみられるところである。

吉野林業の場合、このような藩政期から明治以降期にいたる木材流通機構の変遷と、林野所有の推移との関連分析は、これまでほとんどおこなわれていない。いま吉野林業の性格究明に当って、われわれは様々な角度からこれに接近しようとしたが、その1つとして吉野林業の特質として重要な一側面である借地林業について検討する場合、借地者（育林投資の担い手）の推移、借地条件の変化、たとえば地上権価格における前価、後価の内容変化などが、あるいは吉野材の流通機構——とくにその流通担当者の性格変化に対応しているのではないかという問題意識の上に、吉野林業における木材流通機構の推移をたどり、林野所有と木材業資本との関係を見出そうとした。

ところで、吉野林業は吉野川流域に成立するいわゆる吉野林業地帯と、十津川、北山川流域に成立する十津川、吉野北山林業地帯に分けられるが、木材流通機構の史的推移についてみるならば、前者は和歌山市場、後2者は新宮市場の発展と関連している。また生産される商品という視点から吉野林業を特色づけるものは灘地方酒造業の酒樽需要とつながる樽丸生産にあったといえるであろう。こ

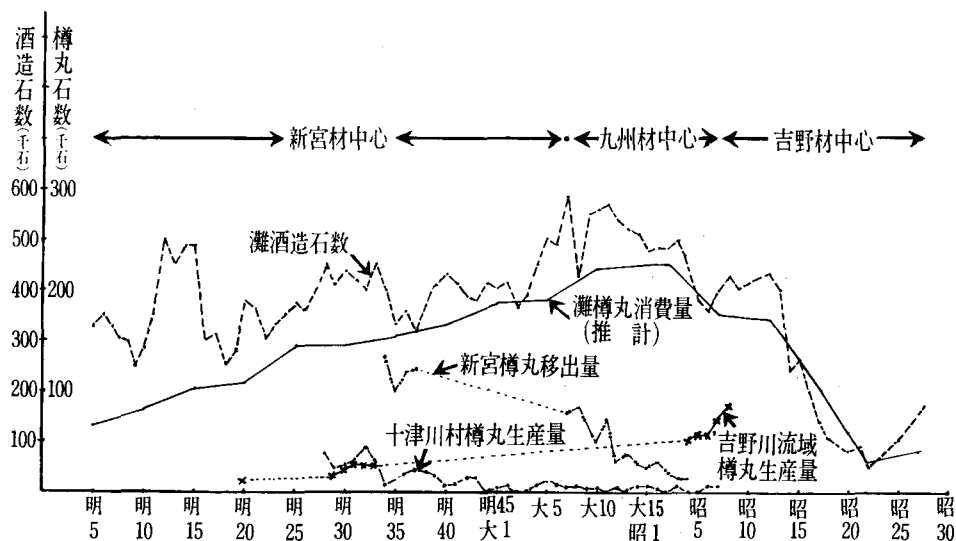
のように、吉野林業における木材流通機構展開の全貌を把握するためには、和歌山、新宮両市場およびそれと密接に関連する大阪市場、灘樽丸市場、更には奈良平野に散在する五条、桜井などの各市場の展開と、吉野川、十津川、北山川流域にまたがる山元木材生産および木材流通の推移を藩政期から現在にいたるまでについて明らかにしなくてはならない。しかしこの小論では、到底、その全貌を把握することはできず、もっとも特徴的な吉野樽丸材の流通機構推移を和歌山、新宮、灘樽丸市場の変貌と関連させ、また山元地域としては、これまでの研究と対応させる意味で、とくに吉野川流域に焦点をおき、また考察時期も明治以降、戦前期までにとどめた。

## 1. 樽丸材流通機構展開の時代区分

(第1図)は灘地方酒造業の造酒石数より推計した樽丸消費量とそれに対する新宮樽丸移出量と吉野川流域樽丸生産量を示したものであるが、これと聞き取り結果とを併せ、灘地方酒造業に対する樽丸材の主な供給先の推移によって時代区分すると、概ね次のように考えられる。

- ① 明治期～大正初期……………新宮材を中心とする時期
- ② 大正初期～昭和初期……………九州材など他地方材を中心とする時期
- ③ 昭和初期～昭和戦前期……………吉野材を中心とする時期

この区分はまた、樽丸材流通機構の質的変化の時期と一致していると考えられるので、以下、この時代区分に従って流通機構の推移を考察してみよう。



(第1図) 灘地方における酒造石数および樽丸需給

註：「本嘉納商店々史草稿」「十津川の山林経済」「吉野林業概要」}より作成  
「明治34年川上他4郷材木同業組合取調書」

換算数値

樽丸1石=1丸=3駄=4斗樽6ヶの造酒2.4石

## 2. 新宮材を中心とする時期

(明治期～大正初期)

吉野地方における樽丸生産は、「吉野林業全書」によると、1700年代(享保年間)に堺の商人が広島<sup>9)</sup>の職人(樽丸師)をつれ、黒滝郷烏住村において製造したのが始めとされ、以後、川上村を始め、吉野川、北山川、十津川流域のいずれにおいても生産がおこなわれたといわれている。

しかし、このような樽丸生産の導入経過に拘らず、明治以後、大正初期にいたるまでの樽丸生産量を樽丸消費量と関連させてみると（第1図）、たとえば明治30年代において新宮に集荷移出されるものが13万石を超えるのに対し、吉野川流域における生産が僅か1万石強であることに示されるように、吉野川流域における樽丸生産の量的比重はなお低いものであった。「吉野林業全書」の指摘する樽丸主産地である川上郷で、明治14年の樽丸生産量が4,500丸（約4,500石）にすぎなかったことから、そのことは窺えるであろう。

このことは、京阪神に近接した吉野川流域では、中世以降、都市形成に伴う木材需要に対応して早くから開発が進み、運送路の整備（流送路整備）もすでに江戸中期には最奥部に達しており、植林の進行もみられ、そこでの林業生産の主目標が用材生産におかれ、またそれを可能とする生産流通条件が整っていたのに対して、開発のおくれた北山、十津川流域では木材の採取条件が著しく劣っており、モミ、ツガを主体とする天然林の粗放的な採取が一般で、スギについては山元で樽丸や板角などの手挽加工をおこない付加価値を高め、運賃負担を軽減する必要があったこと、および樽丸適材としての80～100年生スギ資源量が、相対的に豊富であったことなどの事情がもたらすものであったと考えられる。

とくに明治20年以降、全国的交通の発展に伴ない。新宮材の販路は次第に従来の東京方面から阪神方面へ移り、京阪神仕向けが過半数を占めるにいたったが、同時にまた灘地方における樽丸需要の増大は（第1図）、新宮樽丸材の阪神移出を一層、促進させることになった。十津川村木材生産における明治20年代の樽丸生産増加は、このような背景によっているといえるであろう（第1表）。

（第1表） 新宮市場、十津川村 木材生産、移出量の推移

	十 津 川 村				新 宮 市 場									
	素材生産 量 (千石)	同左構成比 (%)			移出量 (千石)	同 左 構 成 比 (%)							素材製材比 (%)	
		丸太角	樽 丸	板		素 材	角	板	小 割	樽 丸	その他	素 材	製 材	
明 2 8	227	75.1	16.4	1.6										
2 9	237	81.0	10.3	1.5										
3 0	164	74.6	14.0	4.2										
3 1	128	66.6	22.8	4.0										
3 2	289	74.3	15.1	3.4										
明 4 3	241	80.2	6.2	5.8	853	33.8		13.1	3.8			37	63	
4 4	289	85.1	2.8	4.0	908	53.3		16.0	1.9			58	42	
4 5	322	85.0	1.2	5.4	921	50.7		19.7	1.8			55	45	
大 2	235	85.8	1.6	3.9	803	39.5		22.7	2.1			48	52	
3	218	88.1	1.1	2.8	781	31.5		20.6	1.2			63	37	
大 1 0	195	89.2	1.9	1.3	626	15.7	1.0	13.3	4.1	7.5	2.1	19	81	
1 1	208	90.0	0.6	1.5	668	27.1	0.8	12.5	3.4	10.7	1.5	31	69	
1 2	200	88.2	13.6	2.6	739	10.7	0.7	12.7	4.9	3.9	1.9	14	86	
1 3	172	85.8	1.0	5.8	634	8.3	0.8	16.8	4.7	5.6	1.4	11	89	
1 4	182	85.7	2.2	4.2	613	8.0	0.8	12.3	4.9	4.2	3.9	13	87	
昭 3	250	87.8	1.7	2.5	703	6.3	0.7	9.9	5.1	2.5	5.3	13	87	
4	230	88.2	0.3	3.8	759	5.7	0.6	9.6	4.9	1.6	10.3	17	83	
5	199	89.8	0.2	2.2	693	2.1	0.7	11.4	4.8	1.4	12.4	16	84	
7	290	87.3	1.0	1.6	648	12.8	26.4	27.3	29.8		3.7	20	80	

半田良一、山田達夫「十津川の山林経済」より作成

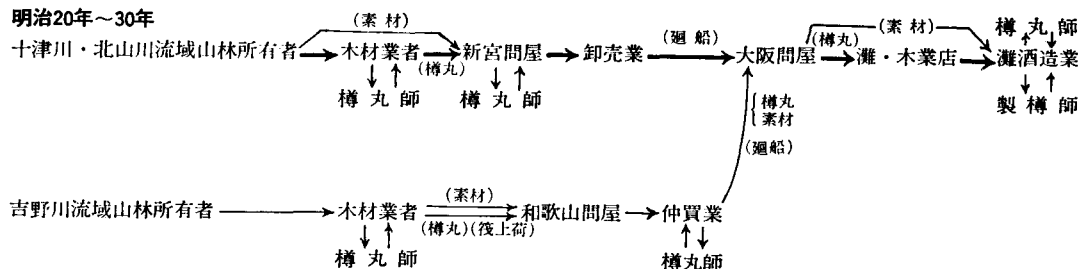
この時期における樽丸材の生産流通は、十津川、北山川流域の場合、主として新宮問屋の手によっ

ておこなわれたが、それは山元木材業者に資金前貸をおこない、樽丸師による樽丸加工をへたのち集荷し、これを多くは新宮問屋所有の廻船で大阪樽丸問屋に販売を委託した。大阪樽丸問屋はこれを灘酒造業の樽材料購入機関としてあった灘木業店に販売し口銭を徴収するものであった。

和歌山問屋のおこなった吉野川流域における樽丸材取引も、ほぼ新宮問屋の場合と同様であるが、なお、この時期においては紀ノ川流送によって和歌山着の丸太を和歌山で樽丸加工し、あるいは灘酒造業者が直接、大阪問屋から吉野丸太を買い入れ、灘で樽丸に加工する場合もみられたといわれる。明治15年、酒樽材料として従来、新宮樽丸材を用いていた菊正宗本嘉納商店が、その材料を吉野川流域材に切替えたのも、後者の方式によっている。この時期の樽丸材流通機構を図示すれば、(第2図)のように考えることができよう。

## (第2図) 樽丸材流通機構(その1)

明治20年～30年



明治30年代始めに十津川、北山川流域の樽丸生産はもっとも増加したが(第1表)、前述したような新宮材販路の変更は、新宮問屋の阪神方面に対する販売の拡大を積極的とし、樽丸販売においても、大阪問屋を介することなく、直接、灘地方の酒造業、製樽業などと取引する傾向が生まれた。ここに樽丸代金の立替、樽丸材の保管、販売受託などを灘地方の酒造業、製樽業、樽材料扱い商人などがおこなうことを通じ、次第に灘樽丸問屋の成立がみられるのである。(第2表)に掲げた灘樽丸問屋の前身は、そのことを如実に示すものである。

この間、吉野川流域の樽丸生産も次第に拡大するが(第1図)、なお2.5～3万石程度にとどまり、全木材生産量の5～6%を占めるにすぎなかった。これに対し新宮材では、明治34～明治38年にいたる間、樽丸材は25～30%の比重を示している(第3表)。

(第2表) 主要灘樽丸問屋

名 称	所在地	出 身
田口正蔵KK	西宮	酒造業番頭
田和吉五郎合名	〃	〃
中田松平合資	御影	製樽道具商
大岡商事KK	西宮	酒造業製樽師
浜中商店合資	大石	製樽業
谷口屋一郎KK	住吉	樽丸結束師

(田口正蔵氏よりの聞取)

(第3表) 吉野川流域、新宮集荷木材と樽丸(石)

川上他四郷(吉野川流域)産材			新宮輸 出 材		
年 次	木 材	樽 丸	年 次	木 材	樽 丸
明治29	368,874	15,110	明治34	440,160	134,560
30	388,932	20,031	35	427,920	98,240
31	370,320	25,204	36	462,000	116,800
32	335,412	23,872	37	489,600	120,000
33	346,296	23,231	38	498,720	123,200

吉野川樽丸材の流通経路としては、従来の和歌山までの筏上荷運搬に代り、明治33年頃からは中流域六田(上市附近)で陸揚げし、陸送によって灘に直送する方法がとられ、明治40年頃には和歌山まで川下げされる樽丸材は著しく減少した。

しかし、和歌山まで川下げされた丸太を樽丸用の丸太として、あるいはそれを和歌山で樽丸加工を加え灘に送ることも併行しておこなわれた。たとえば「室蘭他16市場木材商況調査書」によると、明

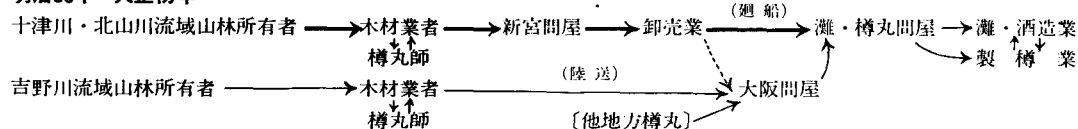
治40年吉野産スギ材の和歌山市場入荷は202,608尺<sup>5)</sup>であるが、樽丸はみられず、一方、和歌山輸出材のうち、「スギ丸太(65,000尺<sup>5)</sup>)、松、桤、榊松等ノ角丸太材ハ樽丸、酒樽、建築用等トシテ主トシテ阪神地方及中国、四国へ<sup>5)</sup>」とあり、また樽丸、酒樽専門の仲買がみられることにも示されている。また一方、明治36年には樽丸を主として取扱う北村問屋(北村宗四郎)が和歌山、大阪で営業を始め、吉野材のみならず、他地方産樽丸の委託販売を始めている。

なお、和歌山市場における一般材の取引は山方荷主である吉野材木同業組合の派遣する郷中支配人と和歌山問屋が指し値を決め、これを仲買人に競売するもので、大阪市場の中継市場として位置づけられた和歌山市場における問屋は単なる中次問屋の意義しか存せず、その利益も、他地方の場合に比べて低く、資金蓄積の余地はなかったといわれる。たとえば、前掲、木材商況調査書にも「上述ノ如ク当市場ノ問屋ハ荷主ト仲買商人ノ取次ニ過キサレバ商略上機敏ノ措置ヲ要スルコト尠ナク加フルニ仲買ヨリハ現金ニテ材価ヲ取立テ口銭(註：3分1厘5毛)ヲ引去リテ荷主ニ交付スレバ足ル……之ヲ要スルニ当市ノ木材商ハ商品ヲ永ク保留スルコトナク買入ルルヤ直チニ之ヲ売却スルヲ以テ資金ノ停滯スルコト少ナク其運轉極メテ円満ナレバ他地方ノ木材商ニ比スレバ一般ニ利益尠ナキヤノ感アルモ少クモ1割ヲ下ラサルベシ<sup>6)</sup>」とあり、これを新宮における問屋の「荷主即仕出人ハ自ラ林主ノ木材ヲ買取り相当ノ手付金ヲ出シ置キ問屋ヨリ仕込金ヲ借りテ伐採ニ着手ス而テ其仕込金ハ往々立木代価ニ相当スルガ故ニ此借金ノ為メニ木材出荷済ノ節ハ己ニ問屋ヨリ何等ノ金銭ヲ受取ルコト能ハサルニ至ル<sup>7)</sup>」といった事情と比較すると、山元業者ないし奥地林業生産に対する支配力において顕著な差があり、和歌山問屋が、その問屋営業を通じ蓄積した資金を奥地吉野川流域の山林集積および育林投資に投ずる余地は少なかったといえるのである。

なお、この時期(明治30年~大正初年)における樽丸材流通機構は(第3図)の如く、図示しうるのである。

### (第3図) 樽丸材流通機構(その2)

明治30年~大正初年



### 3. 九州材など他地方樽丸材を中心とする時期

(大正~昭和初期)

大正期に入り、新宮市場における木材生産・流通量は次第に減少し(第1表)、とくにこれまで過半を占めていた天然林材については著しく、明治末期において出材の66~73%を占めていたものから、大正11年以降になると50%を割り30~20%に激減<sup>8)</sup>し、代ってスギ、ヒノキ人工林材の比重が逆に大きくなる。また新宮市場における製材工場は明治末期から大正初期にかけ10工場の設立をみ、明治40年代には製材移出量がすでに全木材移出量の半ばに達し、更到大正14年に全移出量614千石のうち87%までが製材品の移出となることに示されるように、従来、山元でおこなわれた樽丸などの手挽加工品に代って新宮市場は新宮問屋の支配する製材加工生産地市場としての性格を強めた。

このため樽丸移出も、明治30年前後を頂点として急速に減少し、昭和5年には僅か1万石にすぎず、灘地方に対する樽丸主産地の役割を停止するにいたった(第1図)。

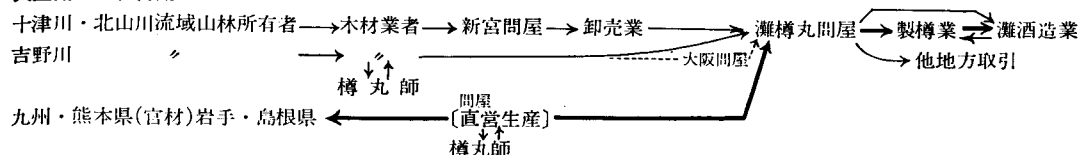
一方、灘地方の酒造生産は、明治末期から昭和初期にかけて増大し、これに伴って樽丸需要も増加する(第1図)。それに対する供給としては、吉野地方の産出する樽丸のみでは充たすことができず、樽丸問屋みずから岩手県花巻地方、鳥取県智頭地方に求め、更に熊本県八代、五箇荘地方の国有林払下げ材を直営現地加工することによって調達した。この九州材は当初、安価であった上に、酒樽

材としてきわめて良質であったため、この間、灘地方樽丸消費量の8割を占めるにいたったといわれる（第4図参照）。

註）西宮樽丸問屋（戦前）、田口正蔵氏および同、中田松平衛氏からの間取りによる。

#### （第4図） 樽丸材流通機構（その3）

大正期～昭和初期

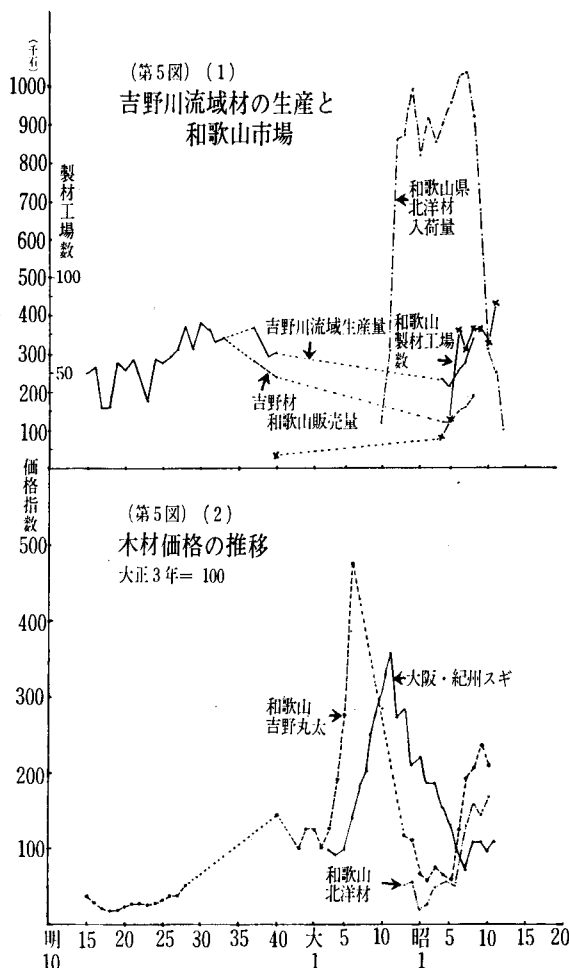


和歌山市場における吉野材の市況は、大正初期において著しい好況を迎えるが（第5図の2）、間もなく大正8年頃から北洋材の入荷が急増し（第5図の1および第4表）、吉野材を始め一般内地材の価格は暴落するにいたった。

和歌山市場は吉野材の大阪市場に対する中継市場としての性格をもつものであったことは前述の通りであるが、同時に古くから吉野材を原材料とする建具など木工品加工生産地市場としての性格をそなえていた。すなわち明治2年には建具業がすでに56戸を数え、その製品を阪神地方に販売していたが、明治18年には建具組合（準則組合）を設立、製品販路も九州、四国へ拡大するにいたっている。

とくに大正、昭和期にかけての発展は著しく、和歌山木材製品総価額中20～60%を建具生産が占め（第5表）、輸出用箱板生産、タンス生産の拡大とともに、これらの原木需要は昭和初期において年間70万石に達した。いま昭和4年における建具用原木21.4万石についてみると、その80%は北洋材、15%が米杉、桧であり、また製箱材料として40～50万石の北洋材が消費されている。すなわち、このような木工加工品の原材料需要が前述した北洋材の大量入荷で充たされ、また同時に昭和4年以降における和歌山製材工場の激増をもたらすものとなり（第5図の1参照）、和歌山市場は北洋材の大量入荷を契機として、

かつての吉野材の中継市場から、外材加工生産地市場へと急速に変貌を遂げるにいたった。昭和5年、和歌山市場に対する木材供給のうち奈良県材は16.5%にすぎず、北洋材はその30%を占めているのである（第6表）。



註：「吉野材木産業組合資料」  
「室蘭他16市場商況調査書」  
「和歌山市統計覧」植松健「木材商業」  
萩野敏雄「北洋材経済史」 } より作成



大正10年、和歌山、大阪における北村問屋が北洋材の取引に失敗し、その吉野樽丸取引を灘樽丸問屋に完全委譲したことも、このような事情を背景としている。この北村問屋の推転に示されるように、大正末期より昭和初期にかけ、樽丸流通機構における大阪および和歌山問屋の役割は失われ、山元と灘樽丸問屋は全く直結されるにいたった（第6図）。

(第4表) 昭和5年和歌山県木材需要量構成比(%)

内訳	総量 (千石)	和歌山県材	奈良県材	三重県材	他県材	北洋材	米材
量(千石)	3,491	855	575	148	789	1,037	87
比(%)	100.0	24.5	16.5	4.2	22.6	29.7	2.5

木の国山林時報 第63号 昭5

(第5表) 和歌山市場木材製品価額構成比(%)

年次	総額 (千円)	木材 (製材)	建具	下駄	タンス	箱	その他	計
大 3	627	25.2	61.9	9.2	3.7	—	—	100.0
昭 1	12,759	43.6	22.2	0.8	9.1	22.6	1.7	100.0
5	11,800	15.9	61.3	1.3	?	21.5	—	100.0
9	10,236	23.7	38.8	0.9	17.4	18.1	1.1	100.0
10	10,417	22.3	42.2	1.2	18.8	14.2	1.3	100.0
12	9,592	24.4	42.8	?	18.9	13.9	—	100.0
14	12,541	39.6	21.9	?	26.2	11.2	1.1	100.0

和歌山市統計要覧(大正2年～昭和14年)より作成

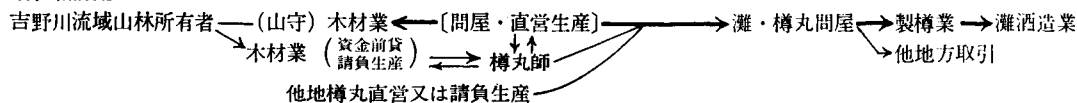
(第6表) 昭和5年における和歌山県の木材供給

	和歌山	奈良	三重	他県	米材	北洋材	総計
量(石)	855,091	574,729	147,556	785,962	87,218	1,036,800	3,487,356
比(%)	24.5	16.5	4.2	22.5	2.5	29.7	100.0

(木材需給調査)

#### (第6図) 樽丸材流通機構(その4)

昭和戦前期



#### 4. 吉野材を中心とする時期

(昭和戦前期)

米材、北洋材の輸入拡大は昭和恐慌と重なり、我国木材価格の著しい低落をもたらせたが(第5図の2)、樽丸材は米材、北洋材とは競合せず一般素材に比べ相対的に有利な価格を保ち(第7表)、和歌山市場価格において、樽丸材の一般材に対する価格比は、大正5～8年で0.5～1.0であったものが、昭和5年には3.5となっており、吉野川流域における樽丸生産は著しく増加した(第1図参照)。昭和6年には山元で樽丸加工され販売されるものは全素材生産の30%におよび(第8表)、山元以外で樽丸加工されるものを含めると可成りな量に達したと考えられる。

この期における山元樽丸生産は、当初、灘樽丸問屋が山元木材業者(主として山守)に立木購入代金の5～8割を前渡し、現地加工したものを集荷して、3分5厘ないし5分の間屋口銭をとり委託販売の形をとっていた。樽丸代金の決済は、一般に樽丸生産が12月に立木を購入、翌年5～6月伐採、皮剥き後、半年ないし1年の乾燥期間をおいたのち、樽丸加工をして問屋送り販売後におこなわれる

ため、代金の清算には1～2年を要した。このような長期の清算となるため、前渡金利も嵩ばり、貸倒れが生じたり、また受託に間に合わぬことも多く、やがて問屋みずから入山して直営生産をおこなう方式に改められていった(第6図参照)。

この時期はまた灘樽丸問屋の最盛期でもあり、樽丸仕入れは年間10万石に達し、そのうち吉野材は60%を占め、12%九州材、8%新宮材、残り20%は岩手、鳥取、鹿児島方面より直営生産、または現地木材業の請負生産によって調達した。また樽丸の販売も灘地方に全販売量の3分の1を向け、残りは愛知、広島、九州、岡山、秋田など、ほとんど全国に向けられたほか、朝鮮、満州などの外地まで、その販路は及んでいる。

しかし、このような樽丸問屋の盛況はまた、衰退への起点でもあった。樽丸生産は戦時木材統制の進行とともに次第に減少し、終戦そして戦後における酒樽が従来の木材からガラス瓶またはホーロー桶への転換によってほとんど消滅するにいたったのである。

なお、北洋材入荷によって急激に変貌した和歌山市場は、やがて北洋材入荷の減少(第5図)、北洋材価格の上昇に伴ってその加工採算を失い(第9表)、昭和10年には北洋材加工50製材工場中40%は内地材加工に転換し、再び原木を吉野材および和歌山、徳島などの周辺材に求めるにいたったが、昭和14年上市、吉野貯木場の開設、ならびに奈良平野南部(五条、橿原、桜井など)における製材工場の増加などに伴って、吉野材流通経路は大きく変化し、和歌山市場が吉野材にとっての主要市場であることの再現を妨げた。このことは戦後、昭和25年、流送の吐絶、上市など奈良平野南部での原木市売市場の出現によって決定的となったのである。

(第7表) 和歌山市場平均単価  
(石当り円)

年次	吉野スギ丸太 (A)	吉野樽丸 (B)	B/A
明治40	5.66	3.13	0.55
43	3.90	2.19	0.56
44	4.95	2.25	0.45
大正1	4.92	2.25	0.46
2	4.80	4.56	0.95
3	3.90	4.53	1.16
4	5.04	2.85	0.57
5	7.50	7.19	0.96
6	10.80	11.50	1.06
7	18.60	9.56	0.51
8	16.80	14.38	0.86
昭和5	2.28	8.00	3.51
6	4.74	—	—
7	7.50	—	—
8	8.10	—	—
9	9.30	8.75	0.94
10	8.22	8.63	1.05

和歌山市統要覧(大正2年～昭和14年)より作成

(第8表) 吉野川流域木材産出量(石)

年次	産出量	川加工材	陸加工材	送和歌山問屋販売数量
昭和4	234,000	646	58,393	127,260
5	216,057	458	64,094	123,091
6	261,396	592	64,797	150,984
7	280,576	379	83,986	160,502
8	347,155	330	102,186	196,315

吉野林業概要より作成  
加工材が樽丸材をほぼ示している。

(第9表) 昭和10年 北洋材中板相場および生産費(和歌山)(円)

中板(4.5分2坪)原木	挽	賃	運	賃	端板割戻	差引売値	市場相場	差引
2.65	0.25	0.10	0.25	2.75	2.70	-0.05		

木の国山林時報 104号 昭9.8

## 5. 総括

以上、吉野樽丸材の流通機構について、その史的推移を和歌山、新宮両市場および灘樽丸市場の変貌と関連させて考察してきた。この考察を通じて、吉野川流域の明治以降における林業発展に視点を限定する限り、その木材流通機構において重要な意味をもつと考えられた和歌山、大阪木材問屋、あるいは灘樽丸問屋は吉野林業に対して決定的な支配力を持続して維持し、その林野所有ないし林業生

産にまで直接、影響をおよぼすことが少なかったと考えられるのである。その主要な理由としては、吉野材運送の自然的条件が、早くから流送、陸送の同時併存を可能としており、運送経路独占による木材問屋資本の閉鎖的集荷圏の形成が困難であったこと、また吉野林業の生産する商品が一般素材と樽丸材に分化し、その流通機構を異にしたため、専一的な問屋支配を弱めるものとなったことなどが考えられるであろう。

このようにしてみると、吉野林業における資本（とくに木材業資本）と林野所有との関連を明らかにするためには、上述のような木材流通機構ないし流通条件を前提として、藩政期の山方商人に始まる吉野川中流域周辺を含めた山元木材業資本の発展分析こそ、今後の吉野林業研究においてもっとも重要であると考えられるのである。

## 文 献

- 1) 笠井恭悦 「吉野林業の発展構造」 宇大農学部学報 第15号 (昭37)  
半田良一 「吉野林業論をめぐる諸問題」 林業経済 183号 (昭39)
- 2) 森庄一郎 「吉野林業全書」 p. 219 (明31)
- 3) 岡 光夫 「私有林における市場の展開」 農業経済 第3号別刷 p.9 (昭33)
- 4) 半田良一 山田達夫「十津川の山林経済」 p. 27 (昭35)
- 5) 山林局 「室蘭外十六市場木材商況調査書」 p. 125, p. 119~120 (明42)
- 6) 同 上 p. 135~136
- 7) 同 上 p. 100
- 8) 前 掲 「十津川の山林経済」 p. 45

## Résumé

In the existing studies on Forestry in Yoshino, we can find few related analyses between changes of circulation mechanism of timbers and ownership of forest-lands since Meiji era. In this paper, the author, first of all, examines the development of circulation mechanism of timbers for barrels ('Tarumaru') which is the most typical in circulation mechanism of timbers in forestry of Yoshino, and intends to get clue to clear the characters of Forestry in Yoshino.

The course of development on the circulation mechanism of 'Tarumaru' can be classified into about three periods, and looking back throughout the development, the wholesale merchants of timbers in Osaka and Wakayama and also the wholesale merchants of 'Tarumaru' in Nada seldom formed the closed collecting ranges with Yoshino district, consequently it seems to be rare for them to keep the definite controlling power constantly and keep having an effect on it.

Then, in the case of advanced studies on Forestry in Yoshino, it is considered an important subject to analyze the development of capital of timber merchants in producing districts, containing the mid-stream area of the Yoshino River.